

※ 「霞堤（かすみてい）」の「堤」の文字に「ツチヘン」と「テヘン」が混在しています。

正しくは、「ツチヘン」ですが、採点には影響はありません。

令和8年度個別学力試験問題

小論文

(経済学部)

解答時間 100分

配点 200点

注意事項

1. 解答開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 受験番号を解答用紙の所定の欄に記入しなさい。
3. 解答は解答用紙の指定された解答欄に横書きで記入しなさい。
4. 問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁及び汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
5. 問題冊子及び下書用紙は持ち帰りなさい。

問題

【資料1】～【資料5】を参考にして、以下の問いに答えなさい。

問

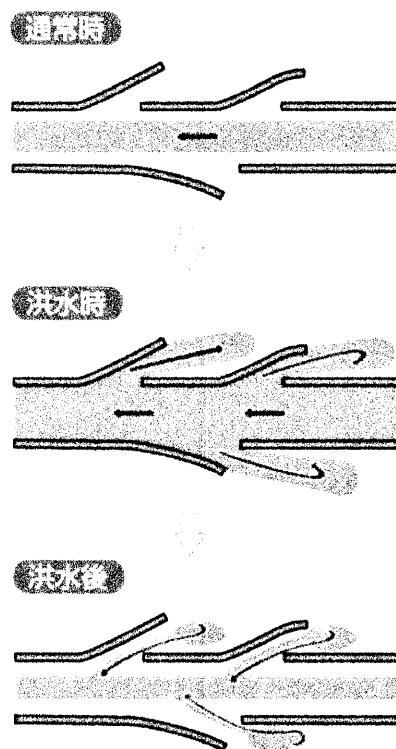
「流域治水」の一連の政策でいわれている「自分事化」という考え方をふまえて「霞堤」をめぐる洪水被害を考えた場合、どのような対策が適切であるか。上流域に霞堤を設置する場合、上流域に霞堤を設置しない場合、それぞれのケースでどのような利害関係が生じるかをまとめたうえで、あなたの考えを1000字以内(句読点を含む)で論述しなさい。

【資料 1】

霞堤(かすみてい)

堤防のある区間に開口部を設け、上流側の堤防と下流側の堤防が、二重になるようにした不連続な堤防のことです。洪水時には開口部から水が逆流して堤内地に湛水し、下流に流れる洪水の流量を減少させます。洪水が終わると、堤内地に湛水した水を排水します。急流河川の治水方策としては、非常に合理的な機能とされています。

霞堤の歴史は古く、戦国時代の武田信玄が考案したと言われています。霞堤の名前の由来は、堤防が折れ重なり、霞がたなびくように見える様子からこう呼ばれています。



(出典：国土技術政策総合研究所，

https://www.nilim.go.jp/lab/rcg/newhp/yougo/words/008/html/008_main.html 2025/09/11 より抜粋・改変)

【資料 2】

バラ農家「その質問はやめて頂きたい」…川を氾濫させ下流の住宅等守る『霞堤』 再起決断できない上流の苦悩

2023年6月、愛知県の東三河地域を襲った豪雨では、豊川が氾濫した豊川市で多くの農家に甚大な浸水被害が出たが、実は想定されたものだったという。

下流を守るためあえて川を氾濫させる“霞堤(かすみてい)”。伝統的な治水方法である霞堤の課題と、農家の苦悩取材した。

■「やめて頂きたいです、その質問は」…バラ農家が再起決断できない理由

2023年6月2日から3日にかけて愛知県の東三河地域を襲った豪雨では、2度の線状降水帯が発生し、豊川市では豊川が氾濫、住宅や農家に大きな浸水被害が出た。

豊川が溢れた、豊川市金沢町でバラを育てる佐久間栄次さん(38)。

バラ農家の佐久間栄次さん：

「ハウスの中がぐしゃぐしゃになってしまっ。て。(ビニールハウスの)この辺まで水がついちゃって、2メートルくらいですかね」。

ハウス3棟で、温度管理をする暖房機などが水没。

被害は2400万円以上にのぼった。

佐久間さんのハウスを映した監視カメラの映像には、午後2時半ごろ、豊川の方向から流木が流れてくるものの、まだハウスの形は確認できる。

しかし、約3時間後には、ハウスは屋根しか見えない状態になっていた。

佐久間さん：

「朝起きて『頑張ろう』と思う時と、ここに見に戻ってきてみて『やっぱりこれはダメなのかな』と思う時。ちょっとガックリきましたね。あまりにもひどかったのです」。

あの日から、毎日現実に直面しているが、復興に向けた動きも始まった。豪雨から1週間後、ボランティア団体や地元の高校生たちが集まり、被害に遭ったバラを運び出す作業を手伝った。

佐久間さん：

「これ以上、農家を続けられないのかなと本当に思っていたんですけど、今日こうやって皆さんの力で、まさかこんなに片付くとは思ってなくて…本当にありがとうございます」。

(中略)

Q. またバラを作っていきますか

佐久間さん：

「ちょっとそれはお答えできないですね、今回、すみません。ちょっとやめて頂きたいです、その質問は。すみません。ここで言ったからって、できるとも限らないのです」。

バラ農家としての再起を決断できずにいた。

■水を溢れさせて下流を守る「霞堤」が産む不平等

背景には、この地域特有のある問題があった。金沢町でジャガイモ農家を営む小野田泰博さん(45)に、豊川の堤防を案内してもらった。

ジャガイモ農家の小野田泰博さん：

「この先の竹やぶがある辺りで、堤防がない形になっています」。

川の水を防ぐための堤防が、なぜか途中で切れていた。

小野田さん：

「堤防がない，霞堤とよばれる区間。堤防がないから全部洪水が発生している」。

江戸時代から続く伝統的な治水方法の「霞堤」だ。

あえて途切れた堤防を造り，大雨で川が増水した際に上流で水を溢れさせる仕組みで，下流の住宅などを守る役割になっている。

豊川には江戸時代から続く「霞堤」が4か所あり，最も上流に位置する金沢町は真っ先に水が溢れ出す場所だ。

今回，農地や住宅が浸水したのは“想定された”被害だった。

小野田さん：

「霞堤があるこの地域で大きな被害が出て，その結果堤防が無事に決壊もせず助かっている。これというのは，色んな人の命を助けたりとか，財産を守っていると。一方で，この地域の住民の命が守られていないような状況だったり，財産が守られてない状況。この辺というのはすごい不平等だ」と。

「わかっていた」被害だが，「不平等」と語るワケ。そこには大きな課題があった。

小野田さんのジャガイモ畑でも農機具16台が壊れ，合わせて800万円もの被害が出たが…。

小野田さん：

「過去には(補償は)一切ないですね。自然災害だからと。法律的にも対応するのは難しいと，予算がないからと」。

霞堤による浸水被害が出て行政からの補償はなく，それぞれの農家が保険に入るしか対応策はないという。

小野田さん：

「一生に1回くらいの災害だったらたまたまだと思えるんですけど(浸水被害が)15年で3回も起きている。そういう状況で，なかなか生活というのも苦しくなっていく一方なので，これからの災害も大規模化したりするという傾向もみられるので，その辺は何とか救済していただきたい」。

■「なにかあった時に元に戻して」霞堤と生きる農家の苦悩

江戸時代からつづく豊川の霞堤。“記録的な”豪雨が当たり前のように起きてしまう今，この地で代々農家を営んできた人たちは苦悩していた。

霞堤の近くで，ナシを育てる小山和也さん(43)の畑では，1.5メートルほど浸水する被害があった。

小山さん：

「殺菌もしたいもんで，細かい所はこれで水をかけて(洗って)あげる。できることはとにかくやってあげたいなと」。

ナシの被害を最小限に抑えるため、1つ1つ丁寧に汚れを落としていたが、小山さんには特別な思いがあった。

小山さん：

「僕2年目です。(父に)教えてもらいながらという感じで」。

20年ほど、トラックの運転手をしていた小山さん。

2022年、父の恵嗣(しげじ70)さんに弟子入りし2023年、初めてナシの栽培を任されたばかりだった。

小山さん：

「いの一番に親父に見せたいですよ。今年初めて、親父のチェックなしに出荷のとこまで僕の判断でやらしてもら。出荷手前でこれが来て、悔しいですよ。本当に悔しいです」。

あれから1カ月。小山さんのナシ農園を訪ねると…。

小山さん：

「まだ、出荷できる状態まで成長してないんですけど、このように順調に育っていて、きれいな状態で。(ナシをかじって)まあ大丈夫そうな味は出ていますので、出荷はできる状態ではないかというところまでようやく来れました」。

浸水の影響で収穫ができなくなった品種もあったが、一部のナシが見事に実をつけていた。

小山さん：

「師匠である親父とも喋ったんですけど、ここ1カ所ともう1カ所畑があって、そちらはほぼダメだっていうことで。(父に)『ダメなもの勉強として扱わせてくれ』とお願いしたら『いいよ』って。なんも迷いもなく『いいよ』って言ってくれて」。

前を向いて歩み始めたが、「霞堤」との“共存”はこれからもつづく。

小山さん：

「ここがそうであるということは、受け入れざるを得ない。引っ越すわけにもいかないですし、先祖代々遺してくれた土地を手放すわけにもいかないですから。受け入れるしかないですから、それに対して大きなことを求めるつもりもないですし。ただ、なにかあった時に元に戻してほしい。それだけです、本当に」。

豊川の「霞堤」について国交省は、今後4カ所のうち1カ所を完全に閉じるほか、他の3カ所についても、堤防の切れている場所に周辺の堤防より高さが2メートルほど低い堤防を建設する計画をしている。ただ、その完成予定は2034年度となっていて、10年以上先だ。豪雨は毎年のように起きていて、農家は「待ってられない」という声や、周辺の堤防より低いものを作ることで本当に守ることができるのかといった声があがっている。

(出典：東海テレビ、

https://www.tokai-tv.com/tokainews/feature/article_20230801_29063 2025/08/22 より抜粋・改変)

【資料 3】

全国の市町村における 10 年間の水害、土砂災害の発生件数(平成 23 年～令和 2 年)

発生件数	市町村数
10 回以上	1005
5 ～ 9 回	427
1 ～ 4 回	268
0 回	41

(出典：国土交通省(2023 年)「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会 第 1 回」資料 2-1、

https://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/suigairisk2/dai01kai/pdf/shiryu2-1.pdf 2025/08/22 に基づき作成)

【資料 4】

流域治水とは

河川区域だけでなく、集水域(雨水が河川に流入する地域)から氾濫域(河川等の氾濫により浸水が想定される地域)にわたる地域において、あらゆる関係者が協働して水災害対策を行う考え方。

川を流れる水の源は、川の上に降った雨だけではありません。

大地に降った雨も、地表を流れたり地中に染みこみながら、川に流れ込みます。この雨が川に入ってくる範囲を「流域」と呼びます。

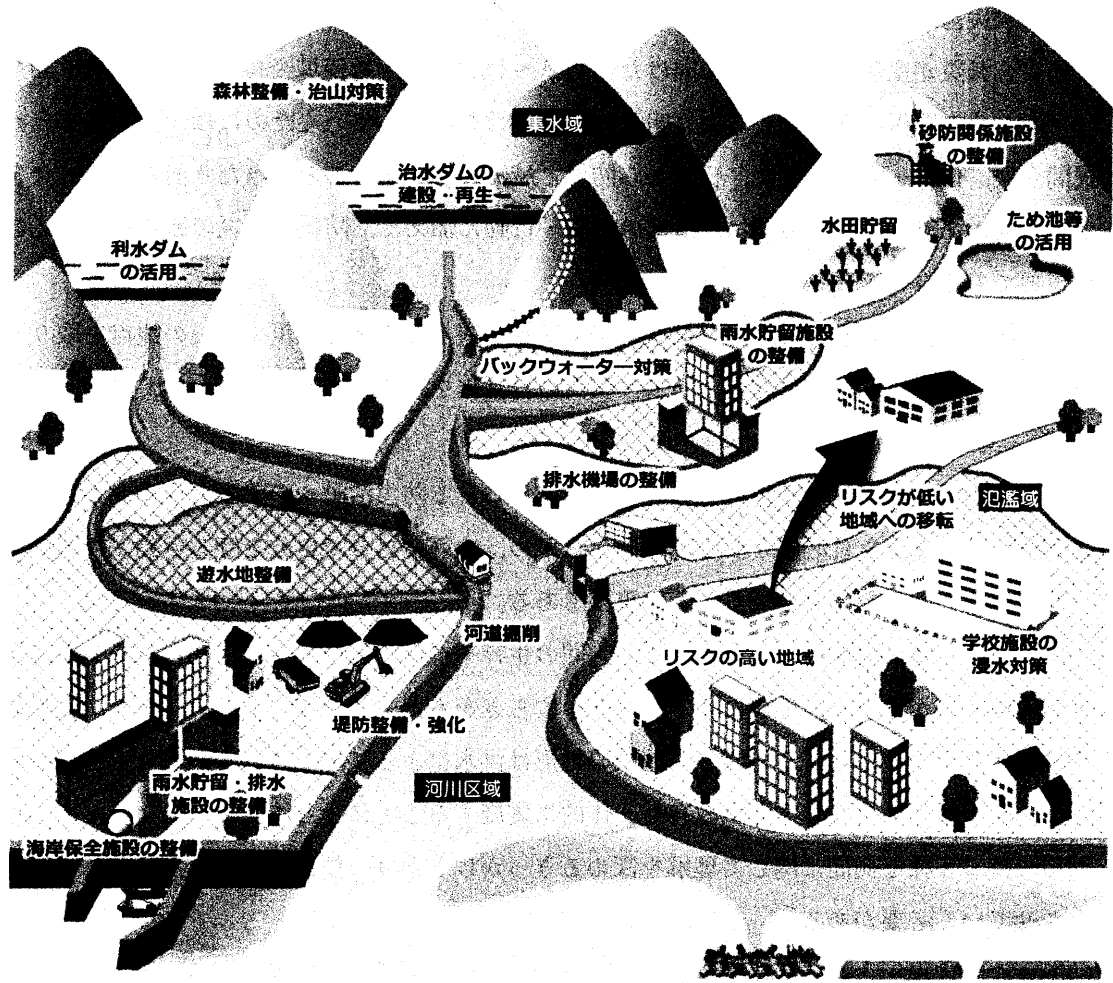
これまでの治水対策は河川管理者による河川区域等の整備が主体でした。

しかし、昨今の気候変動による水災害リスクの増加によって、これまでの河川整備等だけの治水対策だけでは流域を洪水から守り切ることができません。

だからこそ、これからの治水対策は河川だけではなく私たちが生活する大地にも目を向け、流域に関わるあらゆる関係者(国・県・市町村・企業・住民等)が協働して対策を進めていく必要があります。それが「流域治水」です。

例えば、各家庭で雨水を貯める施設を設置したり、水害時の自身の防災行動を整理したマイタイムラインを作成したり、一人一人の行動が流域治水の推進につながります。

図



(出典：国土交通省(2023年)「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会 第1回」資料2-1、

https://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/suigairisk2/dai01kai/pdf/shiryoku2-1.pdf

2025/08/22 より抜粋・改変)

【資料5】

新たな水災害対策の具体策

防災・減災が主流となる社会に向けた仕組み～「流域治水」を流域全体で横断的に取り組む～

- あらゆる関係者が協働して取り組む「流域治水」を推進していくためには、国、地方自治体、民間企業、住民一人ひとりが、日常から防災・減災を考慮することが当たり前となる社会を構築する必要があり、そのためには、日常の意識・行動に加えて、防災・減災の観点を組み込むことが重要である。
- このため、あらゆる行政プロセスや経済活動、様々な事業に防災・減災の観点を取り入れるための仕組みを再構築するなど、防災・減災の日常化を進め、事前に社会全体が災害へ備える力（防災・減災力）を向上させるべきである。
- また、学校における防災教育の充実や地域における防災活動への参画の促進などを進め、住民がいざというときに必要となる情報を自ら集め、冷静に自分で自分を守る行動ができるよう、一人ひとりの備えを充実させることが重要である。
- 河川は、時に大規模な氾濫を生じ、人間の生存や経済活動を脅かす存在ではあるが、平時は自然環境も豊かであり、地域にうるおいとやすらぎをもたらす存在でもある。また、地域の文化や風土は河川とのつながりも深く、地域の地形は洪水によって形成されていることも多い。このため、防災教育のみならず環境教育も一体的に実施することによって、流域のより多くの住民が河川の持つ多様な側面に関して理解を深めるきっかけとなり、住民の流域治水に対する認識を向上させていく必要がある。
- また、住民一人ひとりに至るまで、流域のあらゆる関係者が協働して流域治水対策を進めるにあたっては、その意味や趣旨についてわかりやすく伝えることも重要である。具体的には、あらゆる関係者があらゆる場所で実施することを明確化することや、気候変動への対応や新たな成長を目指すなどの目標を示すこと、意識から行動へと住民の対応を示唆するものなどが考えられる。

(出典：国土交通省(2023年)「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会 第1回」資料2-1,

https://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/suigairisk2/dai01kai/pdf/shiryoku2-1.pdf

2025/08/22 より抜粋・改変)